The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<翻訳>インディオの古代文化に関する報告書
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 1984, 9, p. 75-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《翻訳》

ラモン・パネ著
『インディオの古代文化に関する報告書』

Fray Ramón Pané : *Relación de las antigüedades de los indios*

染　田　秀　藤

〔序〕

ここに翻訳紹介する『報告書』はクリストバル・コロン（コロンブス）の第二次航海に宣教師として随行し，1493年 9 月25日にカディスを出港翌年 1 月にエスパニョーラ島のイサベラに上陸したヒエロニムス会隠修士ラモン・パネがクリストバル・コロンの命令を受けて認めた文書である。

パネに関しては，カタルニア人でコロンの第二次航海に参加し，エスパニョーラ島のインディオの改宗化に真剣に取組んだこと以外，詳しいことは判っていない。大著『弁明史論』*Apologética Historia Sumaria* の中でこの『報告書』を利用してエスパニョーラ島のインディオの宗教や風習を記したラス・カサス(1484？～1566)はパネを見知っていて，彼のことを“地味な性格でインディオに唯一神の存在を知らせようという正しい意図をもち，彼らの言葉が少しわかる人物である”と記している。(Las Casas, B. de: 1967. T. I. Lib. Ⅲ Cap. CXX pp. 633—634)。パネはエスパニョーラ島における本格的な改宗化活動を開始した人物で，同行したベルナルド・ボイル師などとは異なり，インディオの言葉の習得に努めた。彼は身に何もまとわず，時には嫌悪感を催させるような風習に従うインディオたちの外観にとらわれず，彼らの親切な行為や素朴な驚きの中に素晴らしい人間性を見出そうとした（Floyd, Troy S.：1973 p. 38)。他の修道士たちは1494年の晩夏，改宗化活動に絶望して故国へ帰ったが，パネはエスパニョーラ島に留まり，本文中でも出てくるように，1498年まで改宗化に従事し，その間1496年 9 月21日にはインディオの中から最初のキリスト教徒が生れることになった。しかし，1498年以降の足どりについては不明である。

『報告書』の完成時期は定かではないが，1498年以降1504年までの間であ

ると考えられている（Juan Arrom, J.: 1974 pp. 11—12)。『報告書』は1571年にベネチアで発行されたエルナンド・コロンの手になる『提督クリストバル・コロンの生涯』*Historia del almirante don Cristóbal Colón por su hijo don Fernando* のイタリア語版（翻訳者はアルフォンソ・ウリョア）の第61章に掲載された。しかし，それ以来，H. コロンとパネの作品の手稿に関しては何も判っていない。したがって，今日，パネの『報告書』の内容を伝えてくれるのは，同時代のイタリア人ピエトロ・マルティーレ・ダンギエラ（1457～1526）によるラテン語の要約とラス・カサスによるイスパニア語の抜萃，それに上述した1571年のベネチア版だけである。16世紀，エスパニョーラ島のインディオの宗教や風習を叙述するのに，P. M. ダンギエラによる『報告書』の要約を利用した人物にエルナン・ペレス・デ・オリバ（1494？～1531）がいる。彼は『インディアス発見史』*Historia de la invencion de las Yndias* の第9話でダンギエラによるパネの『報告書』の要約を引用している（Pérez de Oliva, Hernán: 1965. pp. 111—126)。17世紀の初頭に公刊されたドミニコ会士グレゴリオ・ガルシアの『新世界のインディオの起源』*Origen de los indios del Nuevo Mundo*（1607年，マドリード）では，ダンギエラによる要約とともに，クロニスタであるアントニオ・デ・エレラ・イ・トルデシーリャス（1549～1625）の『大海の島々や陸地におけるカスティリヤ人の活動の歴史』*Historia general de los hechos de los castellanos en las islas y tierra firme del mar océano*（1601—15年)，〔別名『十年代記』*Décadas*〕に掲載されているパネの『報告書』の要約が引用されている（García, Gregorio: 1981. Lib. V pp. 318—320)。ダンギエラはパネの名を明示しているが，エレラは出典を明記していない。しかし，エレラの記録は内容的にはここに訳出したパネの『報告書』に合致する個所が多く，またダンギエラの作品にはない事柄が記されていて，しかもそれがパネの報告とほぼ同じであることを考慮すると，エレラは現在は散逸しているエルナンド・コロンの作品に収録されたパネの『報告書』を読んだと考えられる（Herrera y Tordesillas, Antonio de: 1944, Lib. Ⅲ. Caps. Ⅲ—Ⅳ, pp. 305—311)。いずれにしても，アルフォンソ・ウリョアによるイタリア語訳以外はすべて『報告書』の要約からの抜萃にすぎない。したがって，ここに訳出する『報告書』の底本はホセ・フワン・アロムがウリョアのイタリア語訳をもとにラス・カ

サスとダンギエラの作品を対照しながらイスパニア語に訳したものである。アロム自身が言っているように，とくに原住民語であるタイノ語の表記については問題点は多い（Arrom ; *Art. cit.*, pp. 17—18)。また，パネ自身も本文中で告白しているように，体系的な叙述がなされていないので，読解にやや労を要する。しかし,原住民の宗教や風習に関して新世界で著された最初の報告書であるこの作品は文化人類学者や歴史学者にとり極めて貴重な史料であると言えよう。尚,〔　〕は訳者注である。

〔**翻訳**〕

令名高き提督で，インディアスの島々および陸地の副王であり総督でもあらせられるクリストバル・コロン殿の命令により，私こと，ヒエロニムス会隠修士ラモンはインディオたちの信仰，偶像崇拝および神々に対する尊崇の仕方に関して学びかつ知得しえました事柄を以下に記すことにいたします。

インディオたちは各自，家の中に偶像を祀っており，その偶像をセミcemíと呼んでいます。彼らは独特な方法でセミを崇め，様々な迷信を抱いています。彼らはセミを在天し，死ぬことがなく，誰も目にすることのできない存在と信じ，またセミには母はいても，その出生は定かではないと考えています。インディオたちはそのセミをユカフ・バグワ・マオロコティ Yúcahu Bagua Maórocoti と呼び，母をアタベイ Atabey, イエルマオ Yermao, グワカル Guacar, アピト Apitoやスイマコ Zuimaco といった5つの名前で呼んでいます。それらはエスパニョーラ島で通用している名称であり，他の島々ではどのように呼ばれているのか，私は行ったことがありませんので，判りません。また，インディオたちは先祖および太陽と月の起源，海の誕生の有様や死者の行き先などについても知っています。彼らの信じるところでは，死者は独り歩きしている人の前に姿を現わします。大勢の人が一緒に歩いている時には，死者が現われないからです。このようなことをすべて，インディオたちは先祖から伝え聞いて信じているのです。と言いますのは，インディオたちは読み書きができず，数も10までしか数えられないからです。

〔第1章〕インディオたちは何処から，どのようにしてやってきたのか。

エスパニョーラ島にはカオナオ Caonao と呼ばれる地方があり，そこにはカウタ Cauta という名の山があります。その山にカシバハグワ Cacibajagua とアマヤウナ Amayaúna と呼ばれる2つの洞穴があります。この島に住みついた人々の大部分はカシバハグワの洞穴から出て来ました。洞穴にいた頃，その人たちは夜の見張りをしていました。ある日のこと，見張りを任されていたマコカエル Mácocael というインディオが洞穴を離れてその日のうちに戻って来ませんでした。太陽に連れ去られたと考えられています。インディオたちは,マコカエルは見張りを怠けたために太陽に連れ去られたと考え，洞穴の入口を閉じてしまいました。そのため，マコカエルは洞穴の入口近くで石に姿を変えられてしまいました。それから，魚を捕りに行った別の人たちも太陽に捕えられ，インディオたちがホボ jobo と呼び別名ミロバラノ mirobálano〔カリロクの木〕とも言われる木になってしまいました。マコカエルが眠らずに見張りをしていたのは人々の行く先を定めるためでしたが，彼にとってこの上なく不運であったのはそれにかなり手間どったことのようです。

〔第2章〕男と女が別れた経緯.

ある時，グワハヨナ Guahayona という名のインディオがヤフババ Yahubaba という男にディゴ digo と呼ばれる草を取って来るよう命じました。ディゴというのは，インディオたちが水浴の時体を洗うのに用いる草です。ヤフババは夜が明ける前に出かけましたが，途中で太陽に捕まり，小夜啼鳥のように，朝に美しい声でさえずる小鳥にされてしまいました。この鳥はヤフババヤエル yahubabayael と呼ばれています。ディゴを取りに行ったヤフババが戻って来ないのを知って，グワハヨナはカシバハグワの洞穴を出る決心をしました。①

〔第3章〕グワハヨナは水浴のためにディゴを取りに行かせた人たちが戻って来ないのを知って激怒し，洞穴を離れる決心をしたこと。

グワハヨナは女たちに向って言いました。「亭主を捨てて，グエヨ güeyo〔草の名〕をたくさん持って別の土地へ出かけよう。子供たちも放っ

ておきなさい。とにかく草だけは忘れずに持って行こう。どうせまた，彼らのもとに戻ってくるのだから」と。

〔第4章〕

グワハヨナは女たちを全員引き連れて洞穴を去り，別の国を求めて出かけました。彼はマティニノ Matininó という所に着くとすぐ，女たちをそこに残して，グワニン Guanín という別の地方へ立ち去りました。女たちはすでに幼い子供たちをとある小川のほとりに残して来ていました。母親が立ち去ったあと，子供たちは次第に腹をすかし，泣き出しました。子供たちは行ってしまった母親の名を呼びつづけましたが，父親は腹をすかして泣きじゃくる子供たちに何もしてやることができませんでした。子供たちは話しかけようと“ママ mama”と言っていましたが，実は乳をねだっていたのです。子供たちは泣き止まず，“トア，トア toa”と言って乳を求めていました。それは，まるでとても小さな声で物をねだっている人のようでした。とうとう，子供たちはトナ〔水〕と呼ばれるカエルのような小さな生きものになってしまいました。トナと呼ばれたのは，彼らが乳を欲しがったためでした。こうして，男たちのもとには女がひとりもいなくなってしまいました。②

〔第5章〕*それから，かつてハイチーと呼ばれたエスパニョーラ島に再び女が現われるようになったこと。島の人々は今でも島をハイチーと呼び，以前はこの島や他の島々は総称してボヒオと呼ばれていた。*

インディオたちには書物も文字もありませんから，どのようにして上述した事柄を先祖から伝え聞いたのか，彼ら自身はっきりと説明することができません。したがいまして，彼らの言っていることは矛盾だらけで，彼らの話を体系だてて記すことなど不可能に近いことです。グワハヨナ，すなわち女たちを全員連れ去った例の男は同じように，アナカクヤ Anacacuya という名のカシーケのもとにいた女たちをも連れ去りました。彼，グワハヨナは自分の仕えていたカシーケであるアナカクヤをもほかの男たちと同じように騙したのです。しかも，アナカクヤはグワハヨナの義兄弟でした。アナカクヤはグワハヨナに同行し，海へ出ました。すると，グワハヨナは

カヌーに乗っていたアナカクヤに向って,「海中にすごく綺麗なコボがある!」と叫びました。コボとは貝のことです。そして，アナカクヤがコボを見ようと身を乗り出した時，グワハヨナは彼の足を掴んで，海へ投げ込んでしまったのです。こうして，グワハヨナは女たちをひとり占めにし，彼女たちをマティニノに残したのでした。現在，マティニノに住んでいるのは女だけであると言われています。その後，グワハヨナはグワニンと呼ばれる別の島へ向いました。グワニンという名は，グワハヨナがその島に向った時，マティニノからグワニンを持って来たことに因んで付けられました。

〔第6章〕グワハヨナがかつて女たちを連れ去ったカウタへ戻ったこと。

グワハヨナは流浪の旅をつづけていた時，ふと海中にひとりの女を残して来たことを思い出しました。彼はそのことをとても嬉しく思い，すぐさま水浴をするため薬草を探しました。と言いますのも，グワハヨナは私たちがフランス病〔梅毒〕と呼んでいる病気にかかっていて体中潰瘍だらけであったからでした。その時彼女はグワハヨナを隔離所という意味のグワナラ guanara へ連れて行きました。そして，そこにいると，彼の病気は治りました。その後，その女はグワハヨナに旅をつづける許しを求めましたので，彼はそれを認めてやりました。その女の名前はグワボニト Guabonito と言いました。グワハヨナも名前を改め，以後，アルベボラエル・グワハヨナ Albeborael Guahayona と名のりました。グワボニトという女はアルベボラエル・グワハヨナに大量のグワニンと腕につけるようにとシバ ciba をたくさん贈りました。シバは大理石によく似た石で，その地方のインディオたちが腕や首によくつけているもので，グワニンはフロリンのような金属で，インディオたちは幼い頃に耳に穴をあけてつるしています。インディオたちの言によりますと，グワニンの人々の始祖はグワボニト，アルベボラエル・グワハヨナとアルベボラエルの父でした。グワハヨナはヒアウナ Hiauna という名の父とともにその地に滞りました。父親からみれば，息子はヒアグワイリ・グワニン Hiaguaili Guanín で，それはヒアウナの子供という意味です。以後，彼はグワニンと呼ばれ，今日でも変りはありません。インディオたちには文字や書物がありませんので，彼ら自身そのような説話を的確に語ることができません。また，私とてそれを正しく

記すことも出来ません。したがいまして,思いますに,私は最後に記さなければならない話を最初に，そして，最初に記さなければならない話を最後にまわしているかも知れません。しかし，いずれにしましても，私はインディオたちが話してくれたとうりに記していますし，作り話はいっさいありません。私は自分がこの国の人たちについて知ったことをありのままに記しているのです。

〔第7章〕現在エスパニョーラ島と呼ばれるハイチーの島に再び女が現われた経緯。

ある日のこと，男たちが水浴に出かけた時，途中で大雨が降り出しました。彼らはその時，とても女を恋しく思いました。また，それまで雨が降るたびに何度も，彼らは自分たちのもとを去った女たちを探しに出かけました。しかし，女たちについては全く手掛りは得られませんでした。しかし，その日は水浴をしていると，人の形をしたものがいくつか木の枝の間を落ちていくのが見えました。それらは男でも女でもなく，男女いずれの生殖器もありませんでした。男たちはそれらを捕えようとしましたが，まるでウナギのようにスルスルと逃げられてしまいました。そこで，カシーケの命令で，2，3人の男が集められました。と言いますのもその得体の知れない生きものを捕えそこねたからで，男たちはその生きものの数を突き止め，その数に見合うカラカラコル caracaracol を探してくるよう命じられました。それは，カラカラコルの手がざらざらしているからで，したがって獲物をしっかりと捕えることができると考えられたからでした。彼らは得体の知れない生きものは4ついたとカシーケに知らせ，そのあとカラカラコルを4人探して，連れて行きました。カラカラコルというのは体中がざらざらになる疥癬のような病気です。得体の知れない生きものを捕えたのち，彼らはどうすればそれを女に変えることができるかを話し合いました。と言いますのも，その生きものには男女どちらの生殖器もなかったからでした。③

〔第8章〕得体の知れない生きものを女にする方法を発見した経緯。

インディオたちは古くはインリリ・カフババヤエル inriri cahubabayael 現在はインリリと呼ばれる鳥を探しに出かけました。この鳥は木をつつく習性があり，私たちがキツツキと呼んでいる鳥です。彼らは男女いずれの生殖器ももたない生きものを捕えてから，その両手両足を縛り，同じように捕えてきたインリリをその得体の知れない生きものの体に縛りつけました。すると，鳥はその体を木と勘違いし，いつものようにつつき始め，本来女の生殖器がある部分に穴をあけました。こうして，最長老のインディオたちの言によりますと，インディオたちは女を手に入れたのでした。私は大急ぎで記しましたし，紙も十分ではありませんので，しかるべき個所に書かなければならない事柄を誤って別の個所に記し，正しい個所に転記することができませんでした。しかし，いずれにしましても，私が書き記しました事柄には間違いはありません。と言いますのも，私が記したとうりに，インディオたちは信じているからです。次に本来なら最初に書かなければならなかった事柄，すなわち，海の誕生，始まりに関するインディオたちの話を記すことにします。

〔第9章〕海の誕生にまつわるインディオの話。

ヤヤ Yaya という男がいました。その男の名前は判っていません。そして，その息子にヤヤエル Yayael というのがいました。ヤヤエルとはヤヤの子供という意味です。ヤヤエルは父を殺そうとしたため，父に追放されました。そうして，ヤヤエルは4ヵ月の間，流浪の生活を送りました。その後，父はヤヤエルを殺し，その骨をヒョウタンの中に入れて，天井からぶら下げました。しばらくの間，そうしておきましたが，ある日のこと，ヤヤは息子を恋しく思い，妻に向って,「ヤヤエルに会いたい」と申しました。すると，妻はとても喜んで，ヒョウタンをおろし，ヤヤエルの遺骨を拝もうとひっくり返しました。すると，ヒョウタンの中から，大小様々な魚がたくさん出て来ました。2人は骨が魚になってしまったと思い，魚を食べることにしました。

さて，ある日のこと，ヤヤが自分の所有地，つまり先祖代々うけついだ森へ出かけたあと，イティバ・カフババ Itiba Cahubaba という名の女が産んだ子供たち4人がやって来ました。子供たちは4つ子でした。出産の

折に母親が死んでしまったので，腹を切開して，上述した4人の子供が取りあげられたのです。最初に取りあげられた子供はカラカラコル，つまり疥癬にかかっていました。その子の名前は〔デミナン Deminán〕と言い，そのほかの子供には名前がありませんでした。④

〔第10章〕出産の折に死んだイティバ・カフババの4人の子供が魚に姿を変えてしまったヤヤエルの骨の入ったヤヤのヒョウタンを取りにいったこと。デミナン・カラカラコル以外は誰もヒョウタンを取ろうとはしなかったこと。デミナンがヒョウタンをおろしたこと。兄弟全員，魚をたくさん食べたこと。

魚を食べている時，ヤヤが森から帰ってくるのに気付き，彼らは大急ぎでヒョウタンを元の場所へ戻そうとしました。しかし，うまく天井に吊すことができず，とうとうヒョウタンは床に落ちて，こわれてしまいました。すると，そのヒョウタンから水が溢れ出し，地上は水びたしになり，同時にたくさんの魚もとび出しました。こうして海はできたのだと，インディオたちは話しています。そのあと，4人の子供はそこを去り，途中でコネル Conel という名の男と出会いました。この男は口がきけませんでした。⑤

〔第11章〕ヤヤの家から逃げたあと，4人の兄弟の身にふりかかったこと。

4人の兄弟はバヤマナコ Bayamanaco の家の前に着くとすぐ，そこにカサベ cazabe があるのに気付き，「アヒアカボ グワロコエル Ahiacabo guárocoel」，すなわち「おじいさんにかけあってみよう」と言いました。デミナン・カラカラコルは兄弟がじっとしたまま動かないのを見て，カサベを貰えるかどうか知ろうと家の中に入りました。カサベとはこの地方でインディオたちが食べているパンのようなものです。カラカラコルはバヤマナコにカサベを頂けないものかと尋ねました。すると，バヤマナコは鼻をさすり，その日に作らせておいたコホバ cohoba の一杯詰まったグワングワヨ guanguayo〔袋？〕をカラカラコルの肩をめがけて投げつけました。コホバとは粉のようなもので，インディオたちが水浴や後述する他の目的のために

よく利用するものです。インディオたちはコホバを腕半分ぐらいの長さの中空の棒のようなものを用いて吸います。つまり，棒の一方の先に鼻をつけ，いまひとつの先にその粉をおいて，鼻から粉を吸いこみます。すると体は大いに清められるのです。さて，バヤマナコは4人の兄弟にパンの代りにグワングワヨを与えましたが，それは兄弟がパンをねだりましたので，バヤマナコが立腹したからでした。それから，カラカラコルは兄弟の所へ戻って，バヤマナコエルとの間で起きたことやグワングワヨで肩をたたかれたこと，それにひどく痛かったことを話しました。すると，兄弟は彼の肩に目をやり，肩のあたりが腫れ上がっているのに気付きました。腫れはとてもひどく，カラカラコルは息も絶えだえでした。それから，兄弟はカラカラコルの肩の瘤をとってやろうとしましたが，仲々うまくいきませんでした。そこで，彼らは石斧のようなものを取り出して，瘤を割りました。すると，中から生きた雌のカメが出て来ました。それで，彼らは家を建ててカメを育てました。この話に関しては，私はこれだけしか知りません。私が記しましたことはさほど重要なことではありません。⑥

また，インディオたちの言うところでは，太陽と月も洞穴から出て来ました。その洞穴はイグワナボイナ Iguanaboína と呼ばれ，マウティアティフエル Mautiatihuel というカシーケの治める地方にあります。インディオたちはその洞穴をたいそう崇めており，形ははっきりしませんが，彼らなりにごてごてと洞穴の壁に画を描いています。洞穴には2つのセミが祀られ，どちらも石像で，大きさは腕半分ぐらいの小さなもので，両手はつながれ，体は汗ばんでいるようでした。インディオたちはその2つのセミをとても崇めていました。雨の降らない時，彼らは洞穴に入って祈りを捧げますと，たちまちのうちに雨が降り出したと伝えられています。2つのセミはそれぞれボイナイエル Boínayel とマロフ Márohu と呼ばれていました。

〔第12章〕死者はずっと放浪しているというインディオたちの迷信について。死者の様子と行為について。

インディオたちは死者はソラヤ Soraya という名の島の側にあるコアイバイ Coaybay という場所へ行くと信じています。コアイバイにいた最初の

人物はマケタウリエ・グワヤバ Maquetaurie Guayaba で，彼は死者の館，住処であるコアイバイの支配者でした。⑦

〔第13章〕死者の姿について。

昼に死者たちは集まり，夜になると外へ出かけます。彼らは〔マルメロ〕に似た味がするグワヤバ guayaba という果物を食べます。昼，死者たちは……であり〔原文空白〕，夜になると果物に姿を変えて，歌ったり踊ったりします。そして，生者と行動を共にします。彼らを死者と見きわめるのに，インディオたちは次のような方法を用いています。つまり，彼らの腹部を手でさわり，へそがないと，オペリト operito，すなわち死者であると言います。したがいまして，死者にはへそがないのです。それで，時々，インディオたちはそれに気づかず，死者に騙されることがあります。例えば，インディオたちはコアイバイの女と床を同じくし，女を抱いていると思っても，実際にはそこに誰もいないことがあるのです。と言いますのも，死者はすぐに姿を消すからです。このことは今でもインディオたちは信じています。死者が生者として行動する時，それはゴエイサ goeíza と呼ばれ，死んでいるとオピア opía と呼ばれます。ゴエイサは男や女になってインディオたちの前にしばしば現われると言われています。かつて，ゴエイサを負かしてやろうという男がいて，ゴエイサを捕えようとしました。しかし，捕えたと思うと，ゴエイサの姿は見えなくなり，その男はゴエイサではなく樹木をたたいていただけでした。結局，男は枝に吊されていました。この話は老いも若きも皆，信じています。ゴエイサは父，母，兄弟，縁者などの姿を借りて現われると言われています。死者が食べる果実はマルメロのような大きさのものです。死者は昼間ではなく，いつも夜に現われますので，インディオたちは夜に独り歩きするのを非常にこわがります。⑧

〔第14章〕上記の話の出所とその話を信じこませる人たちについて。

インディオたちの中にはベヒケ behique という呪術師がいます。後述しますように，ベヒケたちは多くの呪いをかけて，インディオたちに自分たちが死者と言葉を交わしたことや，死者の行為や秘密をすべて知っている

こと，あるいは誰かが病気にかかると，自分が悪霊をとり除いてやれるということを信じこませるのです。私は一部ですが，そうした呪いを目撃しました。もっとも私が記しましたことは，とりわけ多勢の人々，とくに私と親しく付き会った頭株のインディオたちから聞いた話にすぎません。頭株の人たちはほかの誰よりもそうした話を信じているのです。つまり彼らはモーロ人と同じように，自分たちの掟を古くから伝えられた歌に要約して詠み込んでいるのです。モーロ人が教典を掟としているように彼らは歌を掟としているのです。彼らは歌をうたう時，マヨハバオ mayohabao という打楽器を用います。マヨハバオは木製の打楽器で，中は空洞でとても頑丈な細長い楽器です。長さは腕ぐらいで，幅はその半分ほどの大きさです。音を出す部分は蹄鉄職人が使うやっとこのような形をしていて，それ以外は槌の形によく似ています。ですから，全体からみると，首の長いヒョウタンのような恰好をしています。この楽器の音はよく響き，1レグワ半離れていても聞えるほどです。その音色に合わせて，頭株のインディオたちは暗記している歌をうたうのです。楽器を奏でるのも頭株のインディオたちで，彼らは習慣に従い，幼い頃から楽器のたたき方やたたきながら歌う方法を身につけています。さて，次に，これらの異教徒が行なっている他の儀式や習慣について記すことにします。⑨

〔第15章〕ベヒケたちの考えについて。ベヒケたちが薬を決めたり，人々に教えたりする有様について。また，薬で治療する時にしばしば行なわれる呪いについて。

エスパニョーラ島のすべて，もしくは，大部分のインディオは種々様々なセミを崇めています。父，母，縁者や先祖の骨をその中に納めたセミがあり，それらは石か木で作られています。両方のセミを祀っているインディオは大勢います。言葉を話すセミもあれば，食べ物を与えてくれるセミもあります。雨を降らすセミもあれば，風を起こすセミもあります。無知なインディオたちは聖なるカトリックの信仰も知らずに，そのような偶像，もっとはっきり言いますと，悪魔を作り上げ，そのように信じこんでいるのです。誰かが病気になると，インディオたちはその病人をベヒケの所へ連れて行きます。ベヒケはくだんの医者です。医者は病人と同じく

断食を行ない，病人のように振舞わなければなりません。その有様についてはすぐにお判りになるでしょう。また，医者は病人と同じように身を清めなければなりません。そのために，コホバという粉を鼻から吸いこみます。そうしますと，自分のしていることが判らなくなるほど陶酔状態になります。そうして，正気とは思えないようなことを口走ります。セミと言葉を交わしたとか，セミは自分が病気をもたらしたと言ったとか，語るのです。

〔第16章〕ベヒケの振舞いについて。

病人をたずねる時，外出する前に，ベヒケは土鍋のすす，もしくは，粉炭で顔を真黒にします。それは病人にベヒケがその病気について下す診断を信じさせるためです。それから，ベヒケは小骨を数本と僅かな肉を手にとり，落さないよう何かに包みます。病人がすでにコホバで身を清めている場合，ベヒケはそれを口の中に入れます。医者が病人のいる家に入り，席につくと，その場に居合わせた者はすべて口を閉じます。そこに子供がいますと，ベヒケの仕事の邪魔にならないよう，子供を外へ出します。家の中は2，3人の主だったインディオだけになります。そうしてから，彼らはグエヨを数本…とタマネギの葉に包んだ長さ約10cmほどの別の草を食べます。グエヨの葉はインディオたちがよく口にするものです。それらの草を両手でもみつぶしてからこね，口に入れます。それは食べた物を吐き出すためで，そうすれば害を受けなくてすむのです。そうしてから，彼らは先ほど述べました歌を唱えます。そして，松明をつけ，例の草の汁を飲みます。先ずこうしてから，静寂に包まれた時がしばらくつづき，やわらベヒケが起ち上り，すでに言ったように家の中央に1人で座っている病人の方へ歩み寄ります。それから，ベヒケは思うままに病人の廻りを2度歩き回り，病人の前に立ってその両足を掴み，膝のあたりからはじめて足元まで手でさすります。そののち，何かを取り出そうとするかのように，病人の体を強く引っぱります。そうしてから，ベヒケは家の出口の方へ進み，扉を閉めます。そして，「山でも海でも，好きな所へ行ってしまえ」と叫びます。それから麦ワラを吹くように，息を一吹きし，再びふり返って，両手を合わせ，口を閉じます。そして，寒気を感じ

た時のように，手を震わせます。ベヒケは両手に息を吹きかけ，何か堅いものの髄を吸う時のように，息を吸いこみます。そして，病人の首，腹，肩，頬，胸，胃や体中を吸います。それから，まるで何かにがい物を口にした時のように，咳をし，顔をしかめ始めます。そして，手に唾を吐き，口から，前述したように外出前もしくは病人の家に向う途中で口に含んでおいた石，骨，あるいは肉を取り出します。もし取り出したものが食べ物であれば，ベヒケは病人に向って，「お前が苦しんでいるのは食べ物の所為である。見ろ，私がお前の体からそれを取り出してやった。セミがお前の腹の中へそれを入れたのだ。それもお前がセミに祈らなかったか，祠を建てなかったか，供物を捧げなかったからだ」と告げます。また，口から取り出したものが石であれば，「大事に保管しておけ」と告げます。その石は霊験あらたかなものと考えられることもあり，女に子供を宿らせるのによく効くと信じられ，棉に包んで小さな籠に入れて大切に保管されます。そして，その石に彼らは食べ物を捧げます。彼らは同じように家に祀ってあるセミにも食べ物を捧げます。祭りの日など，インディオたちは偶像に食べてもらうため，魚，肉，パンその他ありとあらゆる食物をセミの祠にたくさん供えます。翌日，セミが食べたあと，それらの食物を家に持ち帰ります。このように，彼らは，セミがそれらを食べたと信じていますが，それは迷信にすぎません。なぜならセミは石もしくは木でできたもので，生きものではないからです。⑩

〔第17章〕くだんの医者が時々呪いをかけられた経緯。

上述したことを行なったにも拘わらず，甲斐なく病人が死んだ場合，その人に大勢の縁者がいたり，その人が村を治めている人であれば，医者であるベヒケを相手に闘いを挑むことができます。と言いますのも，貧しいインディオたちはあえてそれらの医者と争わないからです。ベヒケに害を加えようとする人は次のように振舞います。病人が死んだのは医者の所為なのか，それとも，病人が医者の命じた断食を行なわなかった所為なのか，その真相を知ろうと，グエヨというめぼうきによく似た葉をもつ太くて長い草をつみます。この草は別名をサコン zacón と言います。それから，葉をしぼって汁をとり，死者の爪とひたいの上の髪の毛を切り落し，それらを石ですりつぶしてから，草の汁に混ぜます。そして，それを死者の口にふ

くませるか鼻から飲ませます。そうしてから,死者に向って，死んだのは医者の所為なのか，医者が断食をしなかったためなのかと尋ねます。繰り返して尋ねると，ついに死者はまるで生きているかのようにはっきりとした声で話しはじめます。こうして，死者はその質問に答えて，ベヒケが断食を行なわなかったからであるとか，自分が死んだのはベヒケの所為であるとか，と語ります。すると，インディオたちの話では，医者は死者に向って生きているのか，どうしてそうはっきりと話しをするのかと尋ねます。それに対し，死者は死んでいると答えます。そして，知りたかったことが判ると，彼らは死者をもとの墓地へ戻します。これ以外の妖術を用いて知りたいことを知ることもあります。例えば，先ず死体をとり出し，炭焼き人が炭をつくる時に用いるのによく似た大きなかまどを作ります。そして，薪が真赤なおきになると，そのかまどの中に死体を投げ込みます。それから,炭焼き人が炭にかけるように,上から土をかぶせ，しばらくそのままにしておきます。そうしてから，前述したような質問をします。すると，死者は何も判らないと答えます。こうして10回，同じことが繰り返し尋ねられます。11回目からは，死者は何も言わなくなります。死んでいるのかと尋ねても，10回以上は全く口をきかないのです。

〔第18章〕草の汁を死者に飲ませる妖術によって死因が判った時，死者の縁者がベヒケに対して行なう報復について。

ある日，死者の縁者は集り，例のベヒケが来るのを待ち，彼が来ると，足，腕や頭をこわれるほど棒で殴り，いためつけます。そして，彼らは，ベヒケは死んでしまったと思い，そのままにしておきます。夜になると，白，黒，緑，その他様々な色をした蛇がたくさん這って来て，縁者たちが死んだものと思って放っておいたベヒケの顔や体中を舐めまわします。ベヒケはこうして2，3日放置されますが，やがて，足や腕の骨が再び接合し，彼は起き上り，2，3歩歩いて，自分の家に戻ります。途中，ベヒケに出会った人は「死んでしまったのではなかったのか」と尋ねます。すると，ベヒケは，セミが蛇に姿を変えて助けに来てくれたのだと答えます。ベヒケを殺して復讐を逐げたと信じていた死者の縁者たちはベヒケが生きているのを知って激昂すると同時に失望します。彼らは是が非でもベヒケ

を殺したいという思いにかられ，手をかけようとします。今一度，ベヒケを捕えると，今度は彼の目をくり抜き，睾丸をつぶしてしまいます。と言いますのも，ベヒケは，どんなに棒で殴っても叩いても死にませんが，睾丸を取ってしまえば，死んでしまうからです。

〔第18章 b〕死体をかまどの火の中に投げ込んで，死因を知る方法とベヒケに対する報復の仕方について。

かまどを開けると，立ちのぼった煙は，見えなくなるまで上方へ昇ります。そして，煙はかまどから出る時，音をたてます。それから，煙は下降し，医者であるベヒケの家の中へ入りこみます。医者は断食していないと，たちまち病気にかかり，体中に潰瘍ができ，皮膚がむけます。これはベヒケが断食をしなかった証拠と考えられ，そのために病人は死んだのだとみなされます。したがって，すでに述べましたように，縁者たちはベヒケを殺そうとします。こうしたことは，インディオたちがよく行なう呪いなのです。

〔第19章〕木や石のセミの作り方と保管の方法について。

木のセミは次のようにして作られます。道を歩いていると，根のあたりが動いている木を見たとある者が言います。その男は恐しくなって歩けなくなり，「誰ですか」と尋ねます。すると，それに答えて，「ベヒケをここへ呼んで来なさい。そうすれば，私が何者かを言ってくれるでしょう」と言います。男はベヒケのもとへ行って，見たことを話します。すると，その呪術師，つまり妖術師は大急ぎで男の言った木を見に行きます。彼は木の側に腰を下し，4人の兄弟の話のところで述べたように，コホバを作ります。それがすむと，起ち上り，その木に向って，偉大な首長にふさわしいような，ありとあらゆる尊称を捧げます。そして，尋ねます。「仰って下さい。あなたは何者なのですか。ここで何をなさっておられるのですか。私に用がおありなのですか。どうして私を呼びにこさせられたのですか。切って欲しいのですか，それとも私に同行するのをお望みなのですか。どうして，私に連れていってもらおうと思っていら

っしゃるのですか，仰って下されば，畑のある祠を建てて上げましょう」と。すると，木，つまりセミ，偶像，いや悪魔はベヒケに希望を告げます。そして，ベヒケはその木を切り，命じられたことを実行に移します。すなわち，畑のある祠を建て，セミのために年に何回もコホバを作るのです。コホバを作るのはセミに祈りを捧げ，セミを慰め，セミに吉凶を占うためであり，セミに富を求めるためでもあります。戦いで敵に勝てるかどうかを知りたいと思う時，頭株の人たちは彼ら以外誰も入れない家に入ります。そして，彼らの頭首が最初にコホバを作り，楽器を奏でます。彼がコホバを作っている間，同席している人たちはそれが終るまで，誰も口を開きません。祈りを終えると，頭首はしばらくの間頭を下げたまま，腕で両膝をかかえるような恰好をします。それから，やわら頭を上げて空を見上げ，語り始めます。その時，全員，大声で同時に頭首に応答します。全員が話し終えると，セミに感謝を捧げます。それから，頭首は鼻からコホバを吸って陶酔状態となった中で見た幻影を語り出します。彼はセミと言葉を交わしたと言います。そして，戦いに勝てるとか，敵は逃亡するとか，大勢の人が死んだり，戦いが起きたり，飢えが襲ったりするなど，陶酔状態のまま，思い出すままに語るのです。彼の精神状態をよく考えて下さい。つまり，インディオたちの言によりますと，コホバを吸うと，万事が逆転し，人は空に向って歩いていくように思えるそうです。このコホバは石や木のセミだけでなく，すでに述べましたように，死者の肉体のためにも作られているのです。

石のセミには様々なものがあります。医者が体内からとり出すセミもあります。すでに記しましたように，病人がもっているセミは妊娠中の女の出産に効きめがあります。言葉を話すセミもあり，それらは太い大根に似た形をしていて，地面に広がった，風鳥木のような長い葉をもっています。その葉は普通，ニレの葉に似ています。先端が3つあるセミもあり，それはユカを生むものと信じられています。ユカの根はカブによく似ています。ユカの葉は多くて，先が6つか7つに分かれています。ユカを何に譬えていいのか判りません。と言いますのも，私はスペインや他の国でユカに類するものを見たことがないからです。ユカの茎は人間の身の丈ほどです。さて，次にインディオたちが偶像とセミに関して抱いている信仰や誤った考えについて記します。⑪

〔第20章〕ブヤとアイバ *Buya, Aiba* のセミについて。このセミは戦いの時に焼かれたといわれる。しかし，その後，セミをユカの汁で洗うと，腕がはえ，再び目ができ，体が大きくなったと言う。

ユカは小さいものでしたから，大きく成長するようにと，インディオたちは水と上述した汁でユカを洗いました。インディオたちの話によりますと，セミを作った人たちは食べ物としてユカを捧げなかったために，セミによって病気にさせられました。このセミはバイブラマ Baibrama と呼ばれていました。誰かが病気になると，ベヒケを呼びにやり，病気の原因を尋ねます。すると，ベヒケはバイブラマの所為だと言い，バイブラマがその家の世話をしている人々を通してそのインディオに食べ物を与えてはならないと命じたからだと答えました。ベヒケがそう答えたのも，セミであるバイブラマが彼にそのように語ったからでした。

〔第21章〕グワモレテ *Guamorete* のセミについて。

昔，インディオたちは頭株のひとりであるグワモレテの家を建てた時，家の高い所にセミを1つ祀りました。そのセミはコロコテ Corocote と呼ばれていました。インディオ同士の間で争いが起きた時，グワモレテの敵はコロコテを祀っていた家に火を放ちました。その時，コロコテは起ち上り，遠く離れた川岸へ逃れました。インディオたちの話によりますと，このセミは家の高い所に祀られていたので，夜になるとそこからおりてきて，女たちと共寝しました。グワモレテの死後，このセミは別のカシーケのものとなり，同じく女たちと夜を共にしました。しかも，インディオによりますと，グワモレテの土地では頭に2つの冠をもつ子供が時々生れました。それで，インディオたちはよく，「2つの冠をもっているから，確かにコロコテの子だ」と言っていました。その後，このセミはグワタバネクス Guatabanex という別のカシーケのものになりました。このカシーケの治めていた地方はハカグワ Jacagua と呼ばれていました。⑫

〔第22章〕大勢の部下を従えたサバナニオバボ *Sabonaniobabo* という頭株のインディオがもっていたオピエルグオビラン *Opiyelguobirán* という別

のセミについて。

このオピエルグオビランというセミは犬のように4本の足があり，木のセミでした。しばしば夜になると家を抜け出して，森へ行きました。インディオたちはよく森までそのセミを探しに行きました。そして，彼らはセミを探し出して家に戻ると，綱で縛りました。しかし，それでも，このセミは森へ戻りました。キリスト教徒たちが初めてこのエスパニョーラ島に足を踏み入れた頃，インディオたちの話では，このセミは家を逃げ出し，とある沼地へ向いました。インディオたちも跡を追ってそこまでは辿り着きましたが，セミを発見することはできませんでした。このセミについては，今は何も判っていません。これがインディオたちから聞いた話です。⑬

〔第23章〕グワバンセクス *Guabancex* という名のセミについて。

グワバンセクスというこのセミは数あるカシーケ中で最も偉大なカシーケ，アウマテクス Aumatex が治める地方で崇められていました。このセミは女性で，別に2つのセミを従えていたと言われています。1つはグワバンセクスの命令を伝えるセミ，いまひとつは水を集め，支配するセミでした。グワバンセクスは怒ると，嵐と洪水を起こし，家を破壊し，木を根こそぎにしてしまうと言われています。この女性のセミはその地方の石でできています。このセミに従う2つのセミのうち，1つはグワタウバ Guataúba と呼ばれ，グワバンセクスの命令を伝えるいわば使者のような存在で，命令を受けるとその地方のあらゆるセミに対し嵐と洪水を起すように伝えます。いまひとつのセミはコアトリスキエ Coatrisquie といい，山間の谷に水をため，その後，その地方を滅ぼすため水を流したと言われています。インディオたちはそれを信じて疑っていません。⑭

〔第24章〕バラグワバエル *Baraguabael* という名のセミについてインディオたちが信じていること。

このセミはエスパニョーラ島の主要なカシーケの1人のもので，それは

偶像で，様々な名前をもっています。このセミが発見された経緯は次のとうりです。はるか昔のこと，どれほど昔のことかは判りませんが，島が発見される以前のこと，ある日，インディオたちが狩猟に耽っていた時，ある動物に出くわしました。彼らはその後を追いましたが，動物は穴の中へ逃げ込んでしまいました。穴の中を覗くと，彼らは生きもののような木の幹を見つけました。それを目撃した狩人たちはすぐさまその場を離れ主人のもとへ急ぎました。その主人はカシーケで，グワライオネル Guaraionel の父でした。彼らは見たことを一部始終カシーケに話しました。話を聞いたインディオたちはその場所へ行きましたが，やはり彼らも狩人たちの言ったのと同じ物を発見しました。彼らはその木の幹をもって帰り，そのために祠をこしらえました。しかし，このセミは何度もその祠から逃げ出し，もとの場所の近くへ戻りました。それで，くだんの主人かその息子のグワライオネルのいずれかがセミを探し，連れ戻すよう命じました。部下たちは隠れていたセミを捕えて，再び綱で縛り，袋の中へ入れました。しかし，それでもこのセミは縛られたまま，以前と同じように逃げ去ってしまいました。無知なインディオたちはこの話を本当のことと信じています。

〔第25章〕エスパニョーラ島の2人の主要なカシーケ，グワリオネクスの父カシバケル *Cacibaquel* とグワマナコエル *Guamanacoel* が語ったといわれること。

この報告の冒頭で記しましたように，インディオたちが天上に君臨すると言っているあの偉大なる支配者に対し，カイシフ Cáicihu の人々は断食をしました。断食はインディオたちがよく行なうものです。断食の際インディオたちは水浴の時に使うのと同じ草の汁以外は何も口にせず，6～7日間閉じこもります。断食の期間が終ると，食物をとりはじめます。断食をしている間，体力も知力も衰えますので，彼らはおそらく望みどうりの夢をみることができたと言われています。したがいまして，敵との戦いに勝てるかどうか，富を手にすることができるかどうか，あるいは，その他何か知りたいことがあれば，それを知るために，インディオたちはみなセミに敬意を表して断食をするのです。

インディオたちの話によりますと，カシバケルというこのカシーケはユ

カフグワマ Yucahuguamá というセミと言葉を交し，このセミはカシーケに向って，自分の死後，しばらくの間だけ生き残った者が国を支配すると告げました。と言いますのも，ユカフグワマによりますと，立派な身なりをした人たちが国にやって来て，彼らを支配し，殺してしまうことになり，インディオたちは餓死してしまうからでした。しかし，インディオたちははじめ，ユカフグワマの言っている新参者とはカニバル人〔カリブ族〕に違いないと考えました。その後，彼らはカニバル人が物を奪っては逃げ去ることしかしないのを見て，セミの言っているのは別の人たちのことであるに違いないと信じるようになりました。それで，現在，彼らは，それが提督とその部下のことであると信じているのです。⑮

さて，次に，私や私の兄弟がカスティーリャに向おうとしていた頃に目撃したり，経験したりした事柄について記そうと思います。私こと，隠修士パネは，我らが陛下ドン・フェルナンド王とドニャ・イサベル女王の命令により，インディアスの島々や陸地の提督，副王兼総督であらせられるドン・クリストバル・コロン殿が建設された要塞のマグダレーナに向いました。私は総督ドン・クリストバル・コロン殿の命令により，その砦の指揮官であるアルティアーガという人物と共にその地に滞在しましたが，その折，聖なるカトリックの光で神がマグダレーナ地方の主な人々の家をすべて照らされることを祈りました。当時，その地方はマコリス Macorís と呼ばれており，治めていたのはグワナオボコネル Guanáoboconel という人物で，それはグワナオボコン Guanáobocon の子供という意味であります。その館には彼に仕えるインディオや寵臣がいて，彼らはナボリア naboría と呼ばれています。その数は総勢16人で，全員血縁でつながれており，その中に5人の男兄弟がいました。そのうちの1人は死亡し，残った4人は洗礼の聖水を受けました。思いますに，彼らは殉教者として亡くなりました。と言いますのも，彼らは死ぬまでカトリックの信仰を持ちつづけたのが明らかであったからです。最初に殺されたインディオはグワティカバ Guatícaba といい，彼はキリスト教の洗礼を受けた最初のインディオで，のちフワンと呼ばれました。フワンは虐殺された最初のキリスト教徒です。私はフワンの殉教を確信しています。と言いますのも，彼の死に立ち会った数名のインディオから次のような事実を聞き知ったからです。すなわち，フワンは臨終の間際に，「ディオス　ナボリア　ダカ，

ディオス　ナボリア　ダカ　Dios naboría daca」；つまり「私は神の下僕です」と叫んだのです。同じように，兄弟のアントンも，また彼と共に別の兄弟も同じ意味のことを叫んで絶命しました。この家の人々はみな，いつも私と行動を共にし，私を喜ばそうと精一杯のことをしてくれました。その家族の生き残った人々で現在も生存している人たちはインディアスの副王兼総督であらせられるドン・クリストバル・コロン殿の尽力によりキリスト教徒になっています。今日では，神の恩寵により，大勢のインディオがキリスト教に改宗しております。

次に，マグダレーナ地方で私たちの身に起きた事柄について記すことにします。私がマグダレーナ地方に滞在した頃，アルティアーガと数名のキリスト教徒がカオナボ Caonabó という有力なカシーケに率いられたインディオたちに包囲され，提督殿が彼らを救うためにやって来られました。その折，提督殿は私に，マグダレーナ〔つまり〕マコリス地方の言葉は他の地方の言葉と違い，国中どこへ行っても通じないと話され，さらに，私に向って，大勢の部下を治めているグワリオネクスという有力なカシーケのもとで暮すよう命じられました。と言いますのも，グワリオネクスの話している言葉は全土で通じていたからでした。こうして，私は提督殿の命令によりグワリオネクスのもとで暮すことになりました。もっとも私が総督ドン・クリストバル・コロン殿に次のように申し上げたのは確かです。「私にはマコリスの言葉しか理解できません。それですのに，どうして閣下は私にグワリオネクスのもとで暮すのをお望みなのでしょうか。私にヌフイレイ Nuhuirey の数名を是非お供させて下さい。彼らはキリスト教徒になりましたし，両方の言葉ができますから」と。総督殿は私の意見をお聞き届け下さり，好きな者を連れて行くようにと仰りました。神は私にインディオの中で最も優秀な人物，カトリックの信仰を理解した者をつけて下さいました。その後，彼は神に召されることになりました。私にそのような立派なインディオを与え給い，のち召しあげられた神に栄光あれ。実際，私はそのインディオを立派な子供，兄弟のように思いました。彼の名はグワティカバヌといい，のち，キリスト教徒となってからはフワンと呼ばれました。

その地で起きた事の中からいくつかを，また，私とグワティカバヌがどうしてその地を離れてイサベラに向ったか，そしてマグダレーナへ救援に

向った提督殿の帰りを待ちわびたことについて記すことにします。提督殿が来られてからすぐ，私たちはフワン・デ・アヤーラという人物と共に，総督殿に以前命じられたグワリオネクスの地へ向いました。アヤーラは総督ドン・クリストバル・コロン殿より，私たちの住む所から半レグワ離れた場所に砦を造るよう命令されていました。また，提督殿はフワン・デ・アヤーラに要塞にあるものすべて私たちに与えるよう命じました。こうして，私たちはほぼ2年間，カシーケのグワリオネクスと生活を共にし，いつも彼にカトリックやキリスト教徒の習慣を教えました。当初，グワリオネクスは好意的な態度を示し，私たちの望むことをすべて実行し，キリスト教に改宗する気持ちを抱きました。彼はパーテル・ノステル，アベ・マリーア，信経やその他の祈り，それにキリスト教徒にふさわしい事柄を教えてほしいと申し出ました。そうして，彼はパーテル・ノステル，アベ・マリーアや信経を学び，館にいた大勢のインディオも同じように学びました。毎朝，グワリオネクスは祈りを捧げ，館のインディオたちには1日に2回，祈りを捧げるよう命じました。しかし，その後，グワリオネクスは立腹し，その良き意図を放棄しました。それと言いますのも，その地方の他の頭株のインディオたちが，キリスト教徒は悪人であり，力づくで自分たちの土地を奪ったのに，どうして彼らの掟に従おうとするのかとグワリオネクスを詰問したからでした。彼らはグワリオネクスに，もはやキリスト教徒の言葉に惑わされず，共に手を組んでキリスト教徒を殺そうともちかけたのでした。と言いますのは，彼らはもはやキリスト教徒の要求〔金の貢納など〕を満たすことができなくなり，キリスト教徒の思い通りには絶対にならないと決意していたからでした。私たちは，グワリオネクスが良き意図を捨て去ったため，また，彼が私たちの教えたことを放棄したのを知り，その地方を立ち去ることにしました。そして，インディオに教えを説き，聖なる信仰を教えることでより大きな実りを手に入れることのできる地方へ向う決心を固めました。そうして，私たちは別の有力なカシーケの治める土地へ向いました。そのカシーケは以前から好意的な態度を示し，キリスト教に改宗したいと申しでていたのです。そのカシーケの名はマビアトゥエー Mabiatué と言いました。

〔第25章 b〕私こと隠修士ラモン・パネとフランシスコ会士フワン・

デ・ボルゴーニャ，それにエスパニョーラ島で最初に洗礼を受けたフワン・マテオがマビアトゥエーへ出発した時の状況について。

マビアトゥエーという名のカシーケの治める地方に向って，私たちがグワリオネクスの村を出発して2日目のこと，グワリオネクスの部下たちは礼拝堂の側に一軒の家を建てました。その礼拝堂に，私たちは，洗礼志願者，つまり，インディオで最初にキリスト教徒となったフワン・マテオの母親，兄弟，縁者たちが膝まづき，祈り，やすらぎを得られるようにと思って像をいくつか残してきました。また，彼ら以外に7名の者が洗礼志願者となりました。その後，マテオの家の者は全員キリスト教徒になり，カトリックの信仰に従い正しい意図をもちつづけました。それゆえに，その家族は礼拝堂と，以前私が耕したり，耕やさせたりした田畑の管理をするためにそこに滞りました。彼らがこうして礼拝堂を管理していた頃，つまり私たちがマビアトゥエーに向って出発した2日目，6人の男がその7名の洗礼志願者が管理をしていた礼拝堂にやって来ました。6人の男はグワリオネスクの命令だと言って，ラモン修道士が残していった像を出して，こわしてしまうよう命じました。つまり，修道士とその仲間はすでにその村を立ち去っていて，誰が像をこわさせたのか判らないであろうと考えてのことでした。と言いますのも，礼拝堂にやって来たグワリオネスクの6人の部下たちは，6人の少年たちが修道士たちの出発したあと何が起こるのかと恐れながら礼拝堂の番をしていたのを知ったからでした。キリストの教えをうけたその子供たちは彼らが礼拝堂に入るのを思い止らせようとしましたが，彼らは力づくで中に入り，像をとり，持ち去って行きました。

〔第26章〕像に起きたこと，神が御力を示すために行なわれた奇蹟について。

グワリオネクスの6名の部下は礼拝堂を出てから，持ち去った像を地面に投げすてて上に土をかぶせ，放尿して言いました。「さぞかしここにはとても立派な大きな実がなるだろう」と。と言いますのも，彼らがその像を畑に埋めたからで，そこに植えてある木の実は立派なものになるだろうと言っ

たのです。こうしたことはすべて像を侮辱するためでした。洗礼志願者たちの命令で礼拝堂の番をしていた少年たちはその光景を目にして，畑仕事をしていた大人たちの所へ走って行き，グワリオネクスの部下たちが像を破壊し，冒瀆したと告げました。大人たちはそのことを知り，仕事の手を止め，カスティーリャに赴いた兄の提督殿に代って島を治めていたドン・バルトロメー・コロン殿のもとへ大声を上げながら事件を知らせに行きました。ドン・バルトロメー・コロン殿は島々の副王兼総督の代理として犯罪者たちに対する訴えを起こし，真相が究明されると，公衆の面前で彼らを火あぶりにしました。それでも，グワリオネクスと彼の部下たちは以前から命じられてキリスト教徒に納めていた金を次に持参する日に，キリスト教徒を殺害するという陰謀を放棄しませんでした。しかし，この陰謀も露見し，計画実行の日に彼らは捕えられました。それでもなお，グワリオネクスらは邪まな計画を諦めず，4人の男と立派なキリスト教徒であるフワン・マテオ，それにその兄弟ですでに洗礼を受けていたアントンを殺害しました。それから，彼らは像をかくしていた場所へ行って，像を粉々にこわしました。数日後，その畑の持主がアヘ aje を取りに行きました。アヘは大根によく似た根菜で，カブに似たものもあります。像がうめられた場所に，2～3本のアヘがまるで十字架のように，1本のアヘの真中あたりに他のアヘが重なるように生えていました。その十字架は必らず誰かに見つけられるはずでした。しかし，それを発見したのは，私の知る限り，その一帯で最も性質(たち)の悪い女，つまり，グワリオネクスの母親でした。彼女はそれを大いなる奇蹟と思い，コンセプシオンという要砦の長官(アルカイデ)に報告しました。「これは神が示された奇蹟で，そこには像がありました。そのわけは神が知っておられる」と。⑯

次に，インディオたちが洗礼を受けて最初のキリスト教徒となった経緯と，すべてのインディオをキリスト教に改宗させるのに必要な事柄について記すことにします。事実，この島には，処罰を受けるに足る領主を処罰し，その住民に聖なるカトリックを伝え，教えるにはキリスト教徒が少なすぎます。と言いますのも，平民は抵抗することもできなければ，その方法も知らないからです。これは嘘ではありません。私はいやと言うほどそのことを知らされましたし，これまでに私が記したことでも十分にそのことは判っていただけるものと確信しています。賢人には多言は無用で

す。

エスパニョーラ島における最初のキリスト教徒はすでに述べた人びと，つまりナボリアであり，その家には総勢17名のインディオがいました。彼らは，私が神はひとつしか存在せず，その神が万物や天地を創造されたのだと教えただけで，ほかのことを論じあったり，また，私が理解させたりしなくとも，キリスト教徒になりました。といいますのも，彼らは本性，信じやすいからです。しかし，武力や策略が必要なインディオもいます。と言いますのは，人間は必ずしも同じ性質を具えていないからです。最初にキリスト教徒になったインディオたちのように，死ぬまで正しい意図をもちつづける者もいれば，最初は好意的であっても，のちには教えられたことを嘲笑する者もいるのです。こうしたインディオには武力と処罰とが必要です。

エスパニョーラ島で洗礼を受けた最初の人物はフワン・マテオで，彼は1496年の聖マテオの祝日〔9月21日〕に受洗しました。その後，彼の家にいた大勢のインディオがキリスト教に改宗しました。もしインディオに教えを伝え，聖なるカトリック教を説く人がいれば，また，彼らの習慣を正す人がいれば，将来も改宗者の数は増えつづけるでしょう。何故私が改宗化の仕事を容易であると信じているかと言いますと，私は経験からしてそう確信しているからです。とくに，マフビアティビレ Mahubiatíbire というカシーケの場合，ここ3年間ずっと正しい意志をもちつづけ，キリスト教徒になりたいと望んでおり，妻をひとりしかもとうとしません。一般に，インディオたちは3人の妻をもっており，頭株のインディオの中には，10人，15人，さらには20人もの妻をもつ者もいるのです。

以上が，私がエスパニョーラ島のインディオたちの風習や儀式に関して精いっぱい知得し，理解しえました事柄です。私はこれを記したからと言いまして，霊的な，また，俗的な利益をいっさい望んでいるわけではありません。この報告が我らが主にとりお役に立つものであれば，どうか私にこの仕事をつづけさせて下さい。もしそうでなければ，私を愚かな人間と思し召し下さい。

〔註〕

① マコカエル以下この章にいたる話について，ダンギエラは言及しているが（Lib. Ⅸ p. 192），ラス・カサスとエレラは触れていない。ペレス・デ・オリバとグレゴリオ・ガルシアはダンギエラを引用している（Oliva : p. 121—122/García : pp. 318b—319a）ダンギエラによると，マコカエルは世界を知りたいと思って洞穴から離れてしまったため，夜が明ける前に洞穴に戻れず，太陽の光に捕えられて石にされた。ヤフババについては，ダンギエラは名前を明示していないが，毎年，鳥に姿を変えられた日の夜がやってくると，うら悲しい声で自分の悲運を嘆き，グワハヨナ（ダンギエラは Vaguorira と表記）に救いを求めに来る。尚，ガルシアはエレラからの引用と注記しているが，これは誤りである。

② ラス・カサスとエレラを除いて，上記の著述家はこの話を記している。但し，内容はやや異なる。ダンギエラによると，グワハヨナは男たちを洞穴に残して，乳呑み子と母親を連れ出した。彼は，母親と女児をマティニノに残し，男児を連れて旅をつづけたが，子供たちはとある川辺で乳を求めてトア（イスパニア語のママ）と叫びながら餓死し，カエルになった（Danghiera : p. 192/Oliva : pp. 122—123./García : p. 319a)。

③ 7～8章に関して，ダンギエラ（p. 193），オリバ（pp. 123—124），ガルシア（pp. 319 b—320 a），エレラ（pp. 307—308）も同じような話を伝えているが，それぞれパネの報告と細い点で異なっている。例えば，ガルシアは得体の知れない生きものがまるで大群の蟻のようにミロラバノの木を上へ下へと這っていたと記している。

④ ダンギエラ（p. 193）とオリバ（p.124）が言及している。

⑤ ダンギエラは次のように記している：

Sobrevino entonces Jaia, que con frecuencia visitaba los huesos del hijo allí encerrados; asustáronse los jóvenes sorprendidos en sacrilegio y en sospecha de hurto, y como respetaban a Jaia, quisieron huir velozmente y dejaron caer la calabaza, que a causa de su excesivo peso se quebró, derramándose por sus grietas el mar y llenando los valles. La vasta planicie que con su sequedad ocupaba todo aquel mundo insular quedó sumergida, y sólo escaparon a la inundación los montes que hoy constituyen esas islas que nos es dado contemplar (p. 194).

⑥ ダンギエラ（loc. cit.）のみが言及している。彼によると，4人の兄弟はヤヤの家から逃亡して放浪生活を送り，空腹に耐えかねてカサベ職人（パン職人）の家に行った。グワングワヨについてはいくつかの解釈があり，Juan Arrom はグワングワヨを "esputo"（痰）とみなすダンギエラの説を妥当としている（*Relación*... p.69. Nota 69.）．ダンギエラによると，瘤から出て来たのは女性で，兄弟は彼女と生活を共にし，子供をもうけた。

⑦ ダンギエラ（p.194）とエレラ（p.308）が言及している。

⑧ エレラ (p.308) のみが言及している。

⑨ ダンギエラ (p.194–195), オリバ (pp.117–118), エレラ (p.308) が言及している。ダンギエラは最後に次のような文を付加している。

... si el viandante se les enfrenta con intrepidez, el fantasma se esfuma; pero si se deja intimidar, de tal manera lo aterroriza atacándolo que muchos se han enfermado y quedado, como consecuencia de ese miedo, heridos de pasmo." (p. 195).

⑩ ここで言っている「歌」とはアレイト areito のこと。楽器については, エレラ以外, ダンギエラもオリバも言及していない (Herrera: p.309)

⑪ 15・16章に関して, ダンギエラ (pp.195–196), オリバ (pp.118–120), エレラ (pp.308–309), ラス・カサス (Ⅱ: pp.174–176, pp.345–346) も同じように詳しく叙述をしているが, パネの報告と異なる記述もみられる。例えば, オリバは次のように記している:

"Los sacerdotes de sus ymágenes endemoniadas tenían em memoria la religión y se dezían ser yntérpretes de los zemes, por cuyo auiso curauan los enfermos. Sorbían por las narizes el poluo de cooba, una yerua que los hazía atónitos en furor y, confundidas las ymágenes de la fantasía, las cosas que veýan se les representauan como en sueño, confusas y turbadas en su orden. Después de amansada la fuerça desta yerua, dezían al pueblo lo que por aquellas visiones podían o querían congeturar, como hazen nuestros supevsticiosos. Si algún señor estos curauan, ayunauan primero; después en lugar secreto, do solos le acompañauan los que ellos juzgauan ser puros, rodeauan el cuerpo del enfermo, haziendo de su cara feas gestos; después sorbían el ayre en torno de la cabesa del enfermo, y con los ombros los fregauan de los ombros [a] los pies, do ayuntadas las manos como que algo recogiessen, salían presto de aquel lugar, y fuera las sacudían, diziendo que allí yua la enfermedad..."

⑫ 17章からこの章までの話に関しては, エレラ (p.309), ダンギエラ (p.196), オリバ (p.120) がごく簡単にふれている。

⑬ 木のセミに関しては, ラス・カサスがパネの報告をそのまま引用している (Ⅰ, pp.634–635)。

⑭ ダンギエラ (pp.196–197) のみが言及している。

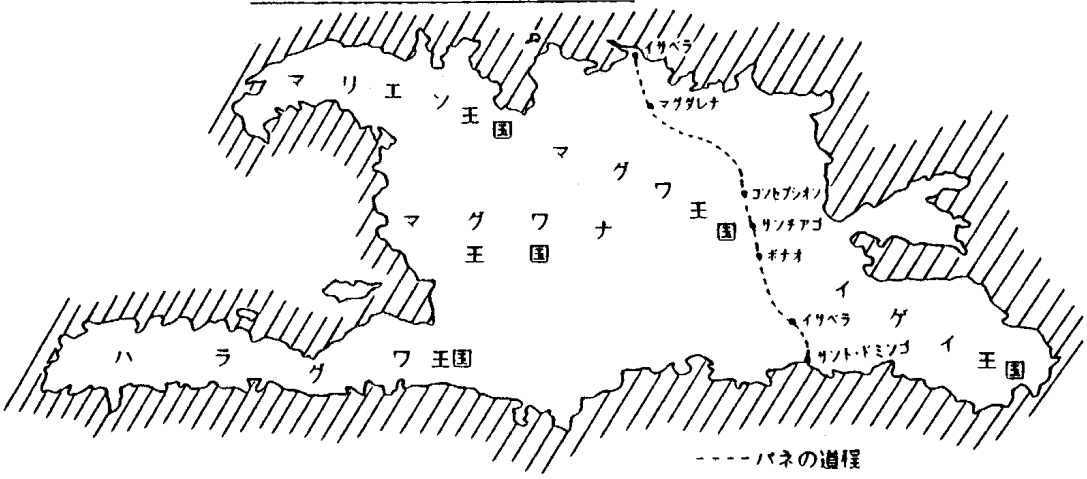
⑮ ダンギエラ (p.197), オリバ (pp.115–116) が言及している。

⑯ ダンギエラ (p.197), オリバ (p.116–117) が言及している。尚, ユカフ・バグワ・マオロコティをはじめ, ここで扱っているオピエルグオビランなどのセミについては, オリバの作品に図版が掲載されている。

⑰ ダンギエラ (pp.197–198), オリバ (p.117)。

⑱ ダンギエラ (p.198), エレラ (pp.309–310) が言及している。これ以降最終章に至る話はラス・カサスとエレラが部分的に言及している (Las Casas, II pp.178–179/Herrera : pp.310–311).

〔参考文献〕

1. Pané, Fr. Ramón : *Relación de las antigüedades de los indios* el primer tratado escrito en América. Nueva versión con notas, mapas y apéndices de José Juan Arrom. México, 1974. (底本)
2. d'Anghiera, Pietro Martire (de Anglería, Pedro Mártir): *Décadas del Nuevo Mundo* 2 tomos. T.I. México, 1964.
3. Floyd, Troy S.: *The Columbus Dynasty in the Carribean 1492-1526.* Alburquerque, 1973.
4. García, Gregorio: *Origen de los indios del Nuevo Mundo* Estudio preliminar de Franklin Pease G.Y. México, 1981.
5. Guerra, Francisco: "The problem of syphilis" en Chiapelli ed. *First Images of America* 2 tomos. T. II. pp. 845-851. California, 1976.
6. Herrera, Antonio de: *Historia general de los hechos de los castellanos en las islas, y tierra firme de el mar occeano.* 10 tomos. T.I. Asunción (Paraguay), 1944.
7. Juan Arrom, José: "Estudio preliminar" (véase No. 1) pp. 4-19, 1974.
8. Las Casas, Bartolomé de: *Apologética Historia Sumaria* Edición preparada por Edmundo O'Gorman, con un estudio preliminar, apéndices y un índice de materias. 2 tomos. México, 1967.
9. Oliva, Hernán Pérez de: *Historia de la inuencion de las Yndias* Estudio, edición y notas de José Juan Arrom. Bogotá, 1965.

16世紀初頭のエスパニョーラ島